

16. 黒澤遺跡

所在地 武川村大字黒澤

調査原因 個人住宅建築に先立つ発掘調査

調査期間 1998年4月30日～1998年9月1日

調査面積 600m²

調査主体 武川村教育委員会

担当者 竹田眞人



本遺跡は、武川村黒沢地区に存在する。南の黒沢川と北の大武川に挟まれた台地上にあり、標高は約550mをはかる。調査地は以前に長芋などの耕作が行われており、遺構や遺物がかなり破壊されていた。

今回の調査では、縄文時代の前期前葉－住居跡1軒、中期中葉－住居跡1軒、中期後葉－住居跡4軒が検出された。

前期前葉の住居跡は、床面は脆弱であり、立ち上がりも不明瞭であった。柱穴もはっきりと確認することはできなかった。建て替えや、2軒が重複している可能性も考えられる。

中期中葉の住居跡は、藤内式期のものであり、覆土中から多くの遺物が検出された。炉は石囲炉であるが一部がぬきとられているようである。この住居跡も、床面・壁ともに不明瞭であった。柱穴は4本から6本であると思われる。

中期後葉の住居跡は4軒検出され、うち1軒が敷石住居であった。敷石住居跡以外の3軒はいずれも床・壁が不明瞭でしっかりと検出することはできなかった。1軒からは石囲炉が検出された。石囲炉の中からは焼土や炭は検出されなかった。敷石住居跡は長径2mほどと非常に小さく、形状は五角形を呈する。入り口部には小型の深鉢を使った埋甕が埋納されていた。住居の奥壁側（北側）は畑の耕作などによる搅乱によって一部破壊されていたが、床面近くから直径5～10mm程度の砂利が検出された。この砂利は、石囲炉側を短辺とする台形のような形に敷き詰められており、その周辺には直径5～8cmほどの小石がめぐらされていた。このような小石は住居の外周にもめぐらされている。敷石の周囲及び下部には、若干の掘り込みが確認されたが、柱穴は検出されなかった。

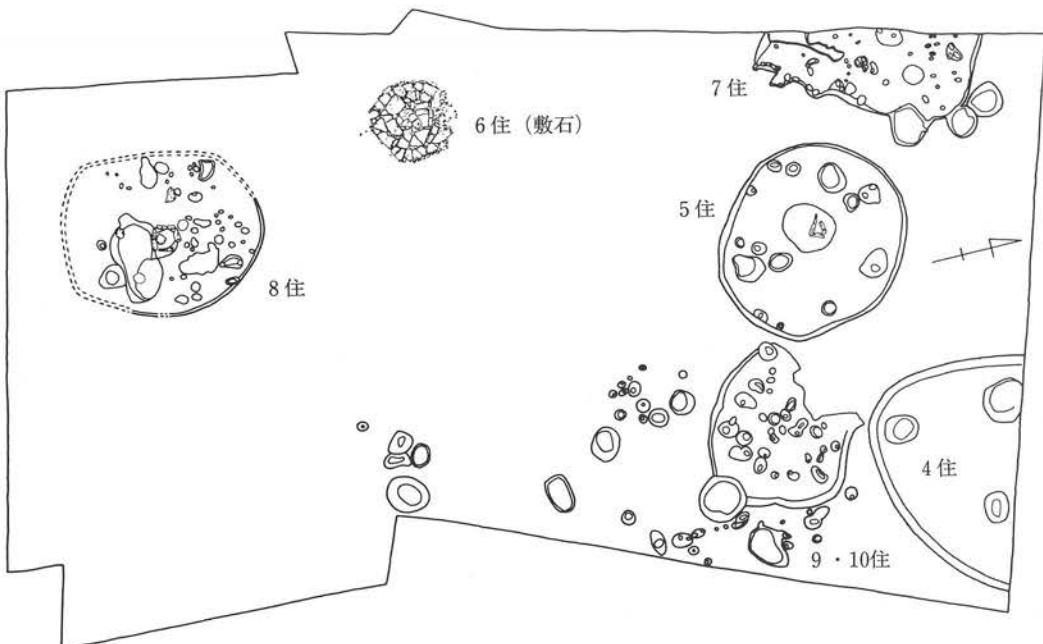
調査地の周辺からは、前期・中期の様々な時期の遺物が表採される。また、黒澤遺跡から斜面を西側に1kmほど上った東原遺跡からは、有舌尖頭器が発見されている。長期にわたって集落が営まれたと思われるこの台地上に、どのように集落が展開していくのか、今後の調査が期待される。



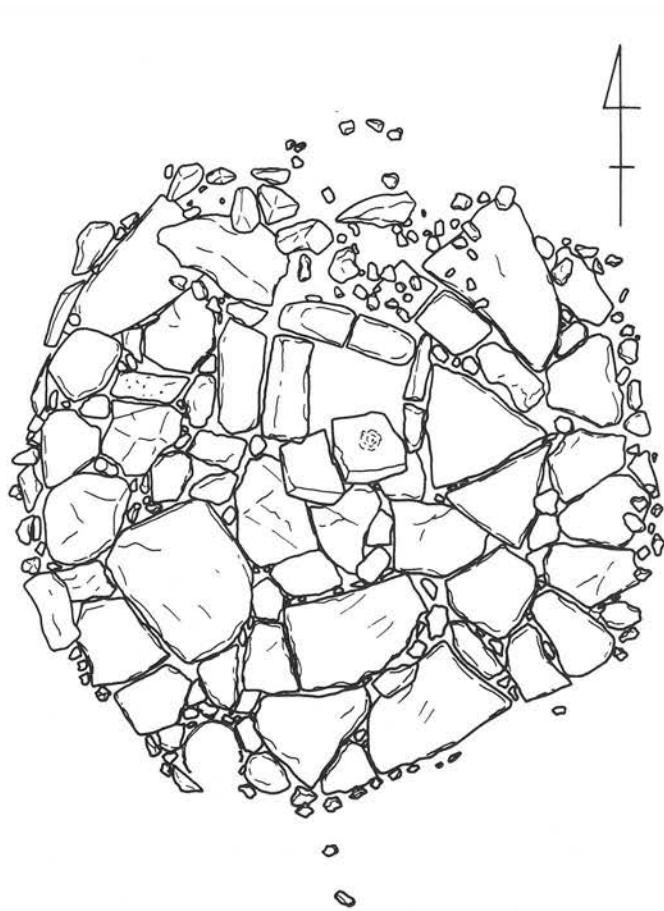
8号住居跡



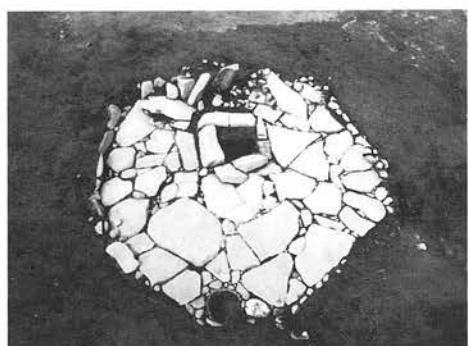
7号住居跡



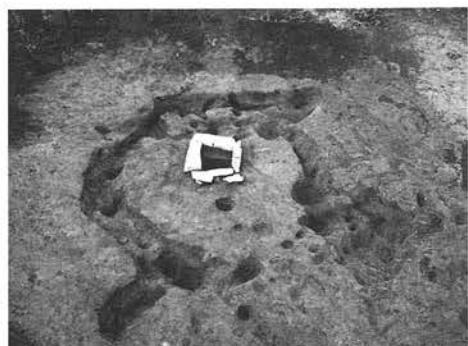
黒澤遺跡 発掘区全体図 S = 1 / 250



敷石住居址（6号住） S = 1 / 50



敷石住居跡



敷石住居跡石除去後